

Join人

特集

記録する、伝える、つづける、つなぐ

おのこの土地には、地域独自の経験の蓄積があります。戦災、公害、大震災など、大きく重い苦難の経験をもつ場所もあります。それを語り伝え、皆で共有することは、未来の地域づくりにとって大きな財産となるのではないのでしょうか。

今回の特集では、「記録すること、伝えること」をテーマにとりあげました。地域の経験を多くの人と共有し、明日の地域づくりを担う人を育て、仲間を増やす。過去に学びながら未来に希望をつなぐ活動です。



足尾に緑を育てる会 02
阪神大震災を記録しつづける会 04
「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク 06
インタビュー 原田正純さん 08

ただいま審判中 宮城県立柴田農林高校 10
(隠岐・海士町)共同作業所さくらの家 11

おじやまします! 三重県立相可高校食物調理科 13
長野県 田毎の月棚田保存同好会 15

地域ニュース 難民支援協会 14



TOPICS ~ イベント案内 ~



劇団プレイバックズ第16回自主公演
あなたのお話を、あなたが主役になった劇にして心をこめて演じます。打ち合わせのない即興劇の世界をぜひご覧ください。
3月30日(日)開演:14:30 横浜人形の家 4階あかいくつ劇場にて。前売3,000円、当日3,500円。お問い合わせ:劇団プレイバックズ(TEL:046-873-2521 ホームページ: <http://www.playback-az.com/pz/index.htm>)

MAD(Making Art Different)
アートを深めるための5つの基本コースと、現代という時代性を読み解く30のフリー・ブロック選択講座で、自分なりの「現代アート」を見つけよう。2008年4月から開講。現代アートを巡る知的好奇心に応える大学院レベルのプログラム。詳細はアーツインシアティプトウキョウ(AIT)まで。
TEL:03-5489-7277 e-mail:office@a-i-t.net ホームページ: <http://www.a-i-t.net>

北いわてのスローツアー「実践パーマカルチャー講座」
講師に花巻市の酒匂徹さん(自然農園ウレシバモシリ)を迎え、実際に植樹をして身の回りの空間をデザインしながら、パーマカルチャーについてわかりやすく学ぶことができる1泊2日のツアーです。
4月1日(土)~2日(日) 森と風の学校(岩手県葛巻町)にて。対象:大人(親子可)。定員20名。参加費15,000円。お問い合わせ:岩手子ども環境研究所 TEL&FAX:0195-66-0646 e-mail:morikaze@m.vb.bigbbe.ne.jp ホームページ: <http://www.5d.bigbbe.ne.jp/morikaze/>

野外カフェSUNDAY
手づくりキャンプサイト。「自分らしく楽しく生きる」がテーマ。4月27日(日)参加費2,500円(ドリンク付き)。定員25名。

ホールアース自然学校では、この他エコツアーなどさまざまなイベントを開催します。お問い合わせ:ホールアース自然学校(TEL:0544-66-0152 e-mail:hfo@wens.gr.jp ホームページ: <http://www.wens.gr.jp/>)

青少年地域ボランティア参加企画 「皆で水族館にお魚を観にいこう」
青少年地域ボランティアの育成、地域認知症ネットワークの強化、タウンモビリティの検証を目的としたイベント。
7月2日(金) 福岡市東区名島地区から東区海の中道。定員:30名程度(うち中高大生10名)。お問い合わせ:ソーシャルサポート相談室(TEL:092-201-4030 ホームページ: <http://www.nadeshicom.com/>)

「水俣を見た7人の写真家たち・水俣写真展 in 豊橋」, 同 in 浜松
6月1日~6月2日 豊橋市立向山文化会館にて。6月2日(土)14:00~記念講演会 講師最首悟さん。
「水俣を見た7人の写真家たち・水俣写真展 in 浜松」は6月2日~6月2日 クリエイト浜松にて。6月2日(土)記念講演会 芥川仁さん。お問い合わせは、「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク TEL:090-1603-0686(代表田嶋) e-mail:otowaase@tsu.taeru.jp

足尾「春の植樹デー」
4月2日(土) 2日(日)10:00より。夏の草刈デーは7月2日(月)。いずれも日光市足尾町「大畑沢緑の砂防ゾーン」にて。
第9回足尾グリーンフォーラムは8月24日(日)9時半より、足尾町「銅親水公演」にて。お問い合わせ:特定非営利活動法人 足尾に緑を育てる会(足尾事務局 TEL:0288-93-2180 FAX:0288-93-2187 ホームページ: <http://www.ashib-m.dori.com/>)

2008年度研究助成、アジア隣人ネットワーク公募案内 応募締め切りは、5月10日です。

トヨタ財団では、「地域社会プログラム」のほかに「研究助成」「アジア隣人ネットワーク」という公募の助成プログラムを実施しています。

研究助成

くらしといのちの豊かさをもとめて「グローバル化のもとでの地域の活性化」に焦点を当て、領域横断的かつ課題解決志向の強い研究プロジェクトの提案を募ります。

- ・助成総額一億五〇〇万円
- ・二件あたりの上限金額二〇〇〇万円
- ・プロジェクト実施期間
- ・一年間プロジェクト二〇〇八年一月一日~二〇〇九年三月三十一日
- ・二年間プロジェクト二〇〇八年一月一日~二〇一〇年三月三十一日

アジア隣人ネットワーク

「人と人とのつながり」がアジアの可能性をひらくアジアの人々が協働することで、課題の解決をめざす活動への助成を行うプログラムです。多地域のつながりだけでなく、多様な人々による取り組みを歓迎します。

- ・助成総額一億二〇〇〇万円
- ・二件あたりの上限金額二〇〇〇万円
- ・プロジェクト実施期間二〇〇八年一月一日~二〇一〇年三月三十一日

応募先と問い合わせ

〒163-0437
東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階 私信箱2336
財団法人トヨタ財団「研究助成」もしくは「アジア隣人ネットワーク」係 電話03-3344-1701。
応募要項、応募書類はトヨタ財団のホームページ(<http://www.toyotafound.or.jp>)で入手できます。

編集後記

「Join人」第2号をお届けします。過去に学ぶことが現代のそして未来の地域づくりにどんな意味をもつのだろうか、その答えに少しでも近づきたいという思いから今回の特集を企画しました。3つの取材の中で毎回、「つづける」ということに対するこだわりが語られたことが印象的でした。「伝える」という活動は、地域活性化の処方箋としては、速効性に欠けるかもしれませんが、しかし、変化の早い今だからこそ、過去をじっくりと見つめなおして、それを分かちあう場が求められているように感じました。(R.K)

Join人[ジョイント]第2号
2008年3月2日発行
発行者 財団法人トヨタ財団
163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1(新宿三井ビル37階)
TEL:03-3344-1701 FAX:03-3342-6911
<http://www.toyotafound.or.jp>
e-mail:gp4ca@toyotafound.or.jp
編集人 田中恭一
デザイン 中井俊明
印刷 株式会社フクイン

人が壊した自然は、 人の手で再生を。 銅のまちの100年プロジェクト



毎年恒例の「春の植樹デー」。苗木は会のほうでも用意するが、植えたい木を持参する人も。親子連れの参加も多い。



銅山中腹にモンスターのように見える古河鉱業足尾製錬所跡。日本近代史の証人として世界遺産にという声も。



「秋の観察デー」には、苗木の成長ぶりを見に来る多くの人が訪れる。10年前に植えた木を見に来たという人もいた。

足尾の山に二〇〇万本の木を植えよう

足尾鉱毒事件は日本近代史のもっとも重要なトピックスの一つだ。銅の生産は日本の近代化を大きく進めた。けれども、生産過程で流れ出た硫酸銅はふもとの村の作物を損ない、製錬所が出す亜硫酸ガスが山の木々を枯れさせるといふ鉱害を発生させた。

「足尾に緑を育てる会」は、二年前から、この荒廃した山に植樹をしている。煙害で裸地化してしまった山の面積は三五〇〇ヘクタール。そのうちの二・五ヘクタールに、足尾本来の緑を取り戻そうという試みだ。

毎年四月に行う「春の植樹デー」は、足尾の風物詩になりつつある。人口約三〇〇〇人のまちに、県内外から一〇〇〇人を超える参加者が集まる。傾斜の激しい山肌を、苗木や道具を

全のため、二〇〇七年からは植樹デーを二日間に分けた。

運営上の困難も増えてきた。「イベントを支えているのは、二〇人ほどのボランティアスタッフ。足場の悪い山肌で、過去一二年間、作業中の事故は起こっていませんが、人数が増え続けると危機管理もさらにたいへんになります。多くの人に参加して欲しい気持ちは強いけれど、大きくなっていくイベントにどう対応していくかが、これからの課題です。」(高桑さん)

足尾の歴史を体験できる環境学習の場として

旧足尾町(現在は日光市などと合併)は、銅山を経営した古河鉱業の企業城下町として栄えた。「鉱毒事件」は負の遺産でも、古河がもたらした功績は否定できない。町の人々が足尾の歴史を語る時、そんなアンビバレントな思いに引き裂かれてきた。

けれども、植樹活動を通じて、その構図に変化が現れ始めた。県内外から参加者を集める植樹は、「地域おこし」として評価されている。また、古河系列の会社を定年退職したシニアが、植樹ボランティアとして関わるケースも増えてきた。植樹はいま、足尾のまちを愛する人々みんなの事業、と位置づけられている。

二〇〇〇年には旧足尾町が足尾環境学習センターを開設し、「緑を育てる会」が施設の運営を任せられた。「足尾を訪れる人の中に、『植樹だけじゃなくて、まちを案内して欲しい、



イベントの先頭に立つ神山英昭会長。体験植樹の指導や、苗木の管理などで、足尾の山を歩かない日はない。



「足尾の山には独特の魅力がある。この魅力に取りつかれると、『帰って来たい』という気持ちになるんです」と高桑春雄さん。

歴史を知りたい」という声がある。これに添えていなくては(神山さん)会の顧問である作家、立松和平さんは、「日本の近代化の象徴ともいえる足尾銅山製錬所は、『未来に生きる子どもたちのためにせひ残したい』と、朝日新聞に寄稿した。人が壊した山の姿と、それを再生させようという人の努力。その二つを一度に見ること、そして参加することができる足尾は、環境学習の場として多くの人に期待されている。

足尾に緑を育てる会

煙害により荒廃した足尾に、緑の山を取り戻そう」と渡良瀬川流域で活動する5団体(渡良瀬川研究会、渡良瀬川にサケを放す会、田中正造大学、あしおネチャーライフ、わたらせ川協会)で発足。毎年植樹イベントを実施している。また、足尾銅山や公害・緑化に関する文献・資料を広く集めた、「足尾環境資料室」の運営なども行う。トヨタ財団の助成では、2005年度の植樹イベントなどを開催した。

四月から一〇月には、小学生の体験植樹を実施。年間約一四〇校が訪れる。希望する企業や団体の植樹も受け入れている。「夏の草刈デー」「秋の観察デー」など、苗木を見守る活動も盛んだ。

言葉には言い表せない思いがあります。だからこそ、愚直に一本ずつ植えつけて。年間何本とか、何年までに何ヘクタールとか、そういう目標はわすらわしいから決めない。ただ、毎年、植える。一〇〇万本と言ってるけど、一〇〇年かかるか、もっとかかるかわからないね」

「治山事業は、国や県が一〇〇年以上前からやってるが、半分以上は根がつかず無駄に終わった。一度壊した山を元通りにするというのは、それだけ難しいことなんです。しかし、人の手で壊してしまったものは、人の手で直したい。この土地で生まれ育った者には、

一言一言、かみしめるように神山英昭会長は語る。一六〇人が参加して、約一〇〇本の木を植えたのが一九九六年の第一回。以来、回を重ねるごとに参加者が増え、延べ七〇〇〇人が、三万七〇〇〇本の苗木を植えた。多数にのぼる参加者の安

緑を取り戻す難しさ イベントを組織する難しさ

被災体験をウェブで公開。

記憶を多くの人と分かちあう

被災者の肉声を被災者の筆で。震災直後に動き出した活動

一九九五年一月一七日、淡路島北部を震源として発生したM七・三の大地震は兵庫県を中心に猛威をふるい、神戸市市街地は、壊滅的な打撃を受けた。「阪神大震災を記録しつづける会」の活動は、まさにこの震災直後に始まる。スタートさせたのは、前代表の高森一徳さん。神戸市内で翻訳と編集の会社を経営していた高森さん自身、三宮にあった会社に甚大な被害を受けた。「父は広島の前爆被災者でした。第三者がたまたま残した被災直後の記録と、父の記憶が一致したおかげで、被爆者手帳を手にした経緯があり、『どんなささいな記録も、残せば人の役に立つことがある』と、よく話していた。それを兄は思い出したのでしょうか」

一徳さんの弟であり、活動をいっしょに担ってきた高森雄三さんは語る。「手記募集を始めたのは二月の中旬から。被災地各所にポスターを貼り、新聞にも取り上げてもらって。日本語、中国語、韓国語、英語で募集したので、一カ月で二四〇通、年齢は五歳〜八五歳、一三カ国の方から手記が集まりました」（雄三さん）

一徳さんの妻で会を引き継いだ香都子さんは、当時の熱気を覚えている。「手記をワープロに打ち込むのも避難所のポスターを見たボランティアの方々に協力していただきました。大学の先生など有識者の方に選考委員をお願いしたのですが、五人の委員の方すべてが被災者。あのときは体験者がみんな『何かしなければ』という思いを共有していたんです」

こうしてこの年五月には、第一巻『被災した私たちの記録』が出版された。「記録する」だけでなく、「記録しつづける」との意味

前代表の一徳さんは、会の立ち上がり当初から、「記録しつづけること」の大切さを強調していたという。とにかく一〇年間は記録をつづける。これが最初からのポリシーだった。大地震直後はマスコミも大勢取材に来るけれど、だんだんと関心は薄れ、記憶は風化していく。しかし、体験者の胸の内には、忘れ去ることのできない思いが残り、時を重ねれば新たな困難にも直面せざるを得ない。「毎年一回手記募集をして出版をつづけ、見えてきたことはたくさんありま



震災直後の神戸市長田区。フランク・カーター氏撮影。市民の撮った写真も同時に集められ、本に掲載された。この被災アルバムも、ネット上で公開されている。

す。被災直後の手記は、本人が自分を奮い立たせるために書く決意表明のようでもあった。ところが、二年目、三年目になると、癒されない精神的な悩みや傷を語る人が多くなりました。買ったばかりのマンションが倒壊してダブルローンを抱えることになった人、住み慣れた町を離れて郊外の復興住宅に移ったためにうつになった高齢者など、「見た目の復興と心の復興の違い」を手記は赤裸々に映し出した。「一方、継続して手記を寄せてくれた人たちが、書くことで気持ちを整理していく過程を読むこともできました」



トヨタ財団の助成を得て立ち上げたホームページ。「未来の被災者へのメッセージ」と題されている。アドレスは、<http://www.npo.co.jp/hanshin/>

活動をきっかけに、震災の語り部となられた方もいます。未来に向けて発信しようという姿勢が顕著になるのは、体験が風化し始めた、六、七年目あたりからでしょうか（雄三さん）

インターネット公開することで世界中からアクセス可能に

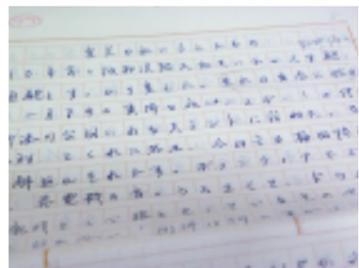
「残念ながら、一〇冊出した本のうち最終巻以外はすでに品切れになりました。しかし、すべてウェブ上で読めるようにしたので、記録は残ります。昨年、二四編を選んで英訳も公開しました。いずれは、中国語、韓国語への翻訳も視野に入れていきます」（雄三さん）
実は雄三さんは、応募原稿が激減した五、六回あたりから、「これを誰が読むんだろう」という思いに苛まれたこともあったという。しかし、ネット

阪神大震災を記録しつづける会

未来の被災者へのメッセージとして阪神大震災の被災者に呼びかけて震災直後より手記を募集。計10巻の手記集を発行した。子どもからお年寄り、日本以外の国々の人など実に多様な人々の手記が掲載されている。「記録しつづける」ことをめざして現在でもインターネット上で手記の掲載や写真資料の掲載を継続している。トヨタ財団の助成では、すでに絶版となってしまう手記集をインターネットに再録し、公開する作業を実施した。



10冊の体験手記集。『もう1年、まだ1年』『まだ遠い春』などのタイトルは、震災後を語るフレーズとして有名に。



被災者の肉筆で綴られた手記が訴えてくるものは大きい。一年目は、チラシの裏に鉛筆で走り書きされた手記もあった。



出前授業

私たちのまちにも「水俣」を伝えたい。 子どもと一緒に考える。

命の大切さを考える 九〇分の出前授業

「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク」代表の田嶋いづみさんが、自身が暮らす神奈川県相模原市にある、大野北小学校で行う出前授業は、今年で六年目になる。

授業で語られる内容は、濃い。美しい海にメチル水銀という猛毒を流してしまつた企業と、適切な素早い対応を行わなかつた国や地方行政の責任。食物連鎖の怖さ。魚を食べたために恐ろしい病気に見舞われたばかりか、いわれなき差別を受けた患者たちのこと。半世紀に及ぶ、それらの長い歴史。

「水俣で起こつたこと、病と戦いながら生きる患者さんの存在は、命の大切さを教え、私たち一人一人の生き方を考えさせてくれます」（田嶋さん）

九〇分間、集中力を持続させるのは



広い校庭のある相模原市大野北小学校。都心へも便利なベッドタウンにある学校だけに、児童数は多い。

挑戦だ。それでも五年生たちは、田嶋さんの話に聴き入っていた。差別に苦しんだ患者のことを知り、涙をこぼす生徒の姿も。

「小五の社会科で扱う四大公害病は、二時限ほどで終えてもいいとされる単

「水俣」を学ぶことは 自分のまちを見つめること

「水俣病は治らないの?」「どうして毒だとわかっているのに流してしまつたの?」「どこへ行ってでも出る質問ですが、子どもたちは『できることなら治してあげたい』と思ひ、『止める方法もあつたんじゃないか』と考える。問題を全身で受け止めてくれるその瞬間には鳥肌が立ちます。未来を生きる子どもたちに『水俣』を知ってほしい。伝えなければと、強く思わされました」

「伝えるネット」のメンバーは、水俣に地縁、血縁はない。いわゆる「当事者」ではない自分たちが伝えることに、初めのうちは、ためらいもあつた。「でも、水俣から遠いところにいる人間が、『自分だったらどうする?』どう生きる?』と問いかけ続け、想像力

を鍛えることは、第二、第三の『水俣』を引き起こさないために、必要な努力ではないでしょうか」

昨年六月、田嶋さんたち相模原のメンバーが主体となり、「さがみはら de MNAMATA's week」というイベントを行った。写真展やシンポジウムを開催。地元商店街の協力を得、相模原市内で環境問題に取り組む他の市民団体とも連携をもつた。

ふつづの主婦を変えた 水俣産甘夏の衝撃

田嶋さんのもとと、水俣や公害に特別関心をもっていたわけではなかつた。しかし、主婦として家族に安全な食品をと始めた共同購入で、水俣産の

無農薬甘夏と出会い、変わった。

段ボール箱に書かれていた、「人に毒を食わされた者は、人に毒を食わせられん」という言葉に衝撃を受け、水俣病について知りたいと思つた。

「知れば知るほど衝撃を受けました。水俣病の原因がわかつてから、公害病と国が認定するまでに一二年もかかつたという事実一つとっても、自分の生きている社会を見る目が変わる。社会生活を営む上で、ぜったい知らなきゃいけないことだ、と思ひました」

この後、小学校を卒業した長女と二人で甘夏畑を見に行ったのをきっかけに、東京・品川で行われた「水俣展」の手伝いをするようになる。

開催後に手元に残つた展示物を利用して、自分の出身地である愛知県豊橋市で「水俣展」を企画。このとき、見学に訪れた小学生に展示の解説をしたのが、「伝えるネット」の原点だ。

「水俣病は、『本願の会』の緒方正人氏の言葉にあるように、人が人を人と思わなくなつてしまつたことから起こつた事件です。人間らしい信頼関係があれば防ぐことができるのでは」

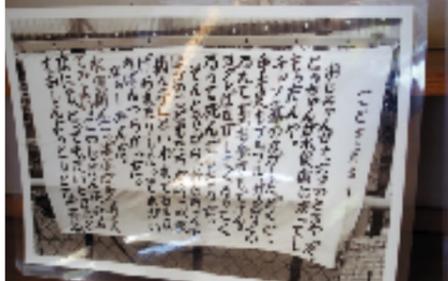
出前授業も「MNAMATA's week」も、結局は「まちづくり」と田嶋さん。「私はこのまちで、この人たちといっしょに生きていく。だからこそ『水俣』を伝え、分かちあいたいんです」

「水俣」を子どもたちに 伝えるネットワーク

公害の原点といわれる水俣病事件、その事実が内包する豊かな課題性と示唆を自分たちの暮らす地域のまちづくりに活かしたいという趣旨のもと「出前授業」という形で子ども達に「水俣」を伝える実践をしている。また、「さがみはら de MNAMATA's week」など地域で「水俣」について考え、まちづくりに活かすための企画も実施。トヨタ財団の助成では、今までの取り組みをまとめ、より多くの人と共有することを目的とした冊子『市民がひらく「水俣」出前授業』、『私たちにとつての「水俣」』を出版した。



授業が行われた教室は、広めのランチルーム。5年生2クラス相手に、田嶋さんの授業に力が入る。



チッソ水俣工場前に座り込み抗議した緒方正人氏が、子どもたちのために書いた文章。



壁に沿って立てかけられた水俣病患者のポートレートに、子どもたちは一心に見入っていた。

筆者紹介

中島京子

東京都出身、作家。著書に『自然と環境に関わる仕事』(主婦の友社)など。最新刊は『平成大家族』(集英社)。

Interview
インタビュー

過去から学び、 未来につなぐ

原田正純さん (熊本学園大学 水俣学研究センター長)



1934年、鹿児島県出身。熊本学園大学教授。水俣学研究センター長。著書に『水俣病』岩波新書など。



『水俣学講義』(日本評論社)は第3集まで刊行されている。

Joinn人は、過去の出来事を記録し、伝える取り組みを特集しました。ここでは、熊本大学医学部で水俣病の解明に尽力し、以後、約半世紀にわたり「水俣」とかかわってこられた原田正純先生に、災害やいわゆる「負の遺産」から学ぶことの意義について語っていただきたいと思っています。今年の一月に、また一つ、水俣病関連の裁判の判決が出ました。

二〇年前に、ある女性が水俣病の認定申請をしたのですが、県が審査をしないうちに、その人は亡くなってしまった。そして死後一七年も経ってから、県は「病院を調査したらカルテが消失していた。これでは判断できないから認定しない」と結論したのです。息子さんは一七年もほったらかしておいた県を訴えました。

ところが熊本地裁の判決は、「原告側の請求棄却」。つまり、県には放置した責任もないし、いままら水俣病とは認めませんよ、というのです。考え

られるうちで最悪の判決です。この話からわかるように、残念ながら「水俣病」は実は、過去の話でもなんでもありません。現在進行形の、解決していない問題です。

国が「水俣病」を公害病と認定してから五〇年近く経つのに、いまだに未解決の問題があるのは恥ずかしいことです。けれども、実際に苦しんでいる人がたくさんいる以上、事件を風化させ、「過去のもの」として忘れ去ろうとするのは間違っています。

今回特集した三団体の活動を、どのように「らんに」になりましたか？
田嶋いづみさんの「伝えるネットワ

ーク」の活動は私もよく知っています。水俣で起こったことを自分の問題として考え、まちづくりに生かしているという試みには、共感しますね。

「阪神大震災」は天災ですが、被災者の手記を残すことは重要だと思いません。私が「水俣」と取り組んできた中で得た教訓の一つですが、被害を受けた人の肉声ほど、後の人に貴重なヒントをくれるものはないのです。

足尾の植樹も、過去を忘れないための活動と位置づけられると思います。足尾には鉱毒事件を題材に草の根的な研究が続けられた一〇〇年の伝統があります。その一環として、裸の山に木を植え、また、廃村跡地などを残し、歴史を伝えることを同時に考えている姿勢を評価したいですね。

原田先生は「水俣学」という新しい学問を提唱されています。

私は医者で、「水俣病」とのかかわりは当然、医学からでした。医者にとって水俣病とはただ、「有機水銀を摂取した魚を食べるとなる病気」です。原因と結果がはっきりしている。

しかし、公害を生んだ背景を考えると、社会や経済、政治の問題でもある。医者が病院と学会にしか目を向けていなかったら、「水俣」の全容は解明できずでした。

この経験から、「水俣」の教訓を学び、生かすための、総合的な学問「水俣学」というものを考えたのです。「水俣学」の趣旨の中には、「生活者に開かれた学問」とあるのは、「水俣病」は生活者の視点なしには、

特集を取材して

「普遍性の高い事件だから」なぜ「水俣」なのですか？という質問に対する田嶋いづみさんの答えです。また、「阪神大震災を記録しつづける会」手記の中には、亡くなられた前代表高森一徳さんの文章で「地震は、日本の国全体に拡散している問題を、前倒して、集中的に顕在化させました」(震災体験記第9集『阪神大震災 記録と記憶』あとがきより)とあります。確かに大きな災害は、「人と人」「人と社会」「人と自然」の関係におけるさまざまな問題を浮き彫りにするようです。そして、今回の取材を通して、それぞれの地で起きたことは、今の私たちが抱える問題そのものであるということに改めて気づかされました。

「足尾」「水俣」「阪神」それぞれについて書籍、新聞記事などで目にする機会は多々あります。しかし、その経験やそこから学んだことを市民の中で共有しているという実践があっはじめてそれぞれの人が自身の問題として受け止めることができるのではないのでしょうか。今回の三つの活動はその役割を担っている活動のように思われます。

さらに、伝えようとしているのは、「問題」だけではないようです。取材の中で「絶望ではなくて希望を伝えたい」という言葉を聞きました。その点も三つの活動に共通していた点ではないかと思えます。足尾の山の荒廃した景色は、想像以上でしたが、そこに植えられた木々がまだ弱々しいながらもしっかりと根を張っているのを見るとそこに希望が見えてきます。

地域再生へ向けた取り組みは、なかなか成果があがらないこともあり、困難にぶつかるとも多いと思います。そのようなときに過去の経験に目を向けることで多くのヒントを得ることができるように思います。また、今皆さんが直面している問題を記録し、世代を超えた多くの人と共有することで地域の問題を自分の問題として捉える仲間を増やしていくことにつながるのではないかと思います。

喜田亮子 (トヨタ財団アシスタント・プログラム・オフィサー)

解明されなかった病気で、「胎児性水俣病」がよい例です。当時の医学では、「母親の胎盤は毒を通さない」と考えられていました。ところが往診に行くとお母さんたちが、「この子がお腹にいたときに、私が食べた魚の毒で、この赤ん坊は歩けなくなりました」と言っています。そこで研究を重ね、「自然界にない物質からは、胎盤は胎児を守れない」という結果が出る。お母さんたちの実感が、医学上の大発見をもたらした。そのことから、私は専門家が専門の枠内に閉じこもってはいけません。ほんとうの学問はできない、と思えました。

生活者とともに「水俣」の肉声から学び、それをまた生活者に還元する。それが「水俣学」の考え方なのです。最後に、過去からの学びを未来に生かすまちづくり、ということについて、一言だけいただければと思います。私がつねに考えているのは、負の痕跡を完全に消し去るべきではないということ。水俣でも、七〇年代から、不知火海の自然を取り戻すためにたいへんな努力をしてきました。一方で、「水俣病」という病名を変えようという運動も起きました。苦しむ患者たちを置き去りにして、過去を忘れようとしたのです。

九〇年代に入り、吉井正澄前市長のときにこれが変わった。ミナマタは世界中に知られた名称。これをブランド力と考えて、環境モデル都市づくりを進め、世界に発信し、「水俣」の名に誇りをもとう、と呼びかけたのです。長い負の歴史の中でばらばらになっってしまった地域住民の関係を築き直すこの作業は、漁師たちの言葉を使って「もやい直し」と呼ばれました。「まちづくり」は、歴史を無視してはならない。辛い過去に向かい合うことになっても、むしろ過去に向かい合うことなかからこそ、未来への希望を見出していくべきではないでしょうか。

ただいま

奮闘中



ユース助成
モクスガニで

一石三鳥をねらえ!

宮城県柴田農林高等学校

水棲生物研究班

私たちの柴田農林高校は、白石川のほとり、蔵王を望む桜の名所「一目千本桜」でも知られる宮城県大河原町にあります。付近には「蟹清水」という場所もあるように、名水の湧く土地柄です。

動物科学科に所属する六名の班員が取り組んでいるのは、日本固有種のモクスガニを飼育する技術の開発です。中国料理で珍重される通称・上海蟹と分類学上近縁にあたるこのモクスガニは、日本各地に分布し、私たちに身近な存在でした。ところが、家庭排水などによる水質の悪化から宮城県南部で

2006年度から新たに開始した「離島助成」と「ユース助成」。創意にあふれたプロジェクトが各地で花開いています。清新なアイデアが注目を集めた2つの活動現場からそれぞれのメッセージを寄せていただきました。



苦勞の末に人工ふ化に成功したモクスガニ。大きく育て、と願いをこめて地元の川に放流。小原温泉のカニ牧場にも提供することができた。地域の名物料理として根付く日を夢見る。

モクスガニの繁殖を通じて地域との
連繫を強めていきたいと思ひます。



が得られることがわかったのです。

カニの数をふやすためには、モクスガニの人工ふ化がどうしても必要でした。しかし実は昨年度、私たちはこの試みに二度失敗しています。もうやめようと半分あきらめていたところに訪れたのが、トヨタ財団からの助成決定の知らせでした。しかも、計画に対し選考委員の「圧倒的な支持」をいただいたというではありませんか。このことが自信になり、三度目の挑戦をすることになりました。

岩手県の北上川流域河川生態系保存



水棲生物研究班の班員6名と顧問の尾形政幸先生。カニを毎日見守ってきた仲間たちだ。

協会を訪ねて管理のしかたを学び、訓練を繰り返しました。安価な材料を組み合わせてふ化槽を自作し、毎週一回の海水運びという大変な作業も頑張つて続けました。そして六月一五日、岩手の漁師さんからいただいた親カニの卵がついに水槽でふ化したのです。一万匹の幼生を前に、皆で「やったあ!」と喜び合いました。

七月八日には、この幼生から一〇五〇匹の稚ガニへの変態に成功しました。生存率一〇パーセントを超える快挙を、研修先の山形県水産試験場の方からも

賞賛していただきました。

次のステップは放流です。地域のみなさんと環境保護団体の協力を得て、町の「環境創造区域」に指定された地区に三〇〇匹の稚ガニを放流しました。出前授業でカニの話をした小学校の子どもたちも自主的に放流活動をしてくれるなど、うれしい反響が確実に広がっています。

今後も農業高校生のプライドにかけ、モクスガニの繁殖を通じて地域との連繫を強めていきたいと思ひます。どうか応援してください。

ただいま

奮闘中



離島助成
『しまからものを』

『届けること』

海士町さくらの家

後藤 隆志

島根半島の沖合い六〇キロメートルの日本海に浮かぶ隠岐諸島のひとつ、中ノ島、海士町。人口二四〇〇人あまり、信号一つ。「島の宝探しをしてみませんか?」まちが掲げた募集要項の一節。そんな言葉に惹かれ、島にやって来て気付けば三年が過ぎようとして



福来茶オリジナルブレンドティーバッグタイプ。地元外では、こちらが人気です。



さくらの家の前で集合して。毎日一緒に仕事をする仲間たち。前列右端が後藤隆志さん。

います。

さくらの家と出会ったのは、島に来てまだ一カ月も経たない頃。偶然、参加したさつまいもの苗植え作業と一緒にしたことがきっかけとなり、出会いが生まれました。「どうして、海士町に来たの?」「困ったことがあったらいつでも言うていいけんあ」そう優しく話しかけてくれたメンバーの皆さん。そんなさくらの家が大好きに、気付けば自分の居場所になっていました。さくらの家は心に病を持った仲間が集うグループです。さくらの家は笑顔の絶えない楽しい場所。そんなさくらの家がずっと続いていくためには、工賃をあげていくためには、何かアクションを起こさなければならぬ。農作業をはじめ、小物づくり、草刈り、障

子貼りなど各種作業の請負い等、さくらの家ではいろいろな作業が行われていました。何かを軸に商品開発ができないだろうか、幾度となく議論が繰り返され、着目したのがクロモジのお茶でした。

島では昔からクロモジ(クスノキ科 一般的には和菓子の爪楊枝として使用される)のことを「ふくぎ」と呼び、健康茶として飲んでいたので。また、五右衛門風呂を使用していた頃には、ふくぎを入れて入浴剤として使っていました。爽やかな香りが広がるふくぎの香りは癒される香りとして島の生活に欠かせないものでした。さらに調べていくと島では昔からさまざまな山野草が飲まれており、健康茶として親しまれていたようです。島にあるものから生み出す、作り出すという島人の知恵を学んだ瞬間です。その一方で、本土から多くの物資が入ってくるに連れて、こうした産品は次第に消えつつあるのが実状でした。そこで、この「ふくぎ茶」の魅力さをさくらの家から発信しよう！ということになりました。



これが「ふくぎ」です。山の斜面に生えています。

地主の方にお願いにいき、自生したクロモジを乱獲に陥らないよう、少しずつ頂きながら作業を行っています。少しずつ、少しずつ自分たちのできることから改良を加えていきました。島のおっちゃん、おばちゃん、いろいろな人に聞いては手を加えているうちに、ふくぎ茶のブラッシュアップが進み、1人、また1人とふくぎ茶づくりを応援してくれる仲間が増えていったのです。ある日のこと、「ふくぎ茶」って福が来るお茶だよ。誰かがボツリと呟きました。「それいいよね」「それで



福来茶オリジナルブレンドリーフタイプ。急須に入れて煮出して飲みます。少し酸味のあるすっきりとした味わいです。



デパートの催事「島根の物産展」で福来茶をすすめる後藤隆志さん。

「ふくぎ茶」の魅力を さくらの家から発信しよう!



た
だ
い
ま
奮
闘
中

地

元の人に支援してもらっているので恩返ししたい」と、「まごの店」で働く三重県立相可高校食物調理科二年岡田直哉君。伊勢いもを練りこんだところろそばをはじめ地元でとれた食材を使った料理を出す高校生レストラン「まごの店」。テレビや新聞で話題になり、休みの日には開店前から人が並び、仕入れから調理、接客、会計まですべて相可高校食物調理クラブの生徒が行う。

まごの店は、二〇〇二年、うどんを売る屋台として五桂池ふるさと村内の「おばあちゃん店」(農産物の直売所)の前でスタートした。多気町役場の職員と相可高校村林信吾先生の茶飲み話、その始まり。かねてから高校生が調理したものを実際に販売できる実践の場があればと考えていた村林先生のアイデアが形になった。店は、みるみるうちに成長し、二〇〇四年には、総面積約三八〇㎡、総工費八九〇〇万円のレストラン「まごの店」が開店した。レストランのある五桂池ふるさと村前村長の河合安巳氏は、「まごの店と中心しようという気持ちだった」と当時をふり返って笑いながら言う。

営業日の前日は、夜の八時過ぎまで仕込みをし、当日は、仕入れのために朝の六時頃から市場へ行く。「大変だけれど楽しい。みんなの力でやっているからやめられない」「就職すると調理は調理だけ、サービスの経験はなくなるから全部できるのはいい経験」「やめたくなくなるときもあるけど、続けるこ

おじゃまします! — PO訪問記

高校生レストラン「まごの店」は今日も大繁盛



店の広いオープンキッチンはさながらキッチンスタジオ! きびきびとした声が響く。

とが、自分のためになるから」と生徒たちは言う。取材をした日は三五度の猛暑、店の前の芝生にホースで水撒きをする生徒、送迎バスの洗車をする生徒。レストランで働くのは、料理をす

っているのかなあと思ったよ」と感心しきり。ふるさと村内では、地域の多くのお年寄りが働いている。「生徒たちは、結構怒られるんですよ。おじいさんお

ることではない。以前、生徒をまこの店まで送り迎えしていた河合氏は、「バスの中で話すことといったらだしのとり方とかそんな話ばかり、遊びの話は全然しないので、こんな高校生

ばあさんに」と村林先生。「おじいさんとかおばあさんとか、町の人やね、勝手にそれぞれ自慢しているんだよ」と河合氏。卒業生もたずねてくる。「ふるさと村」は、さながら相可高校食物



調理クラブの「ふるさと」。

前述の岡田君は、同じく高校二年生の平澤健太君とともに台湾で開催される国際高校料理コンテストに出場する。日本からは、初めての参加だ。当日調理するレシピの内容について聞くといきいきと説明してくれた。「卒業したら県外のお店に就職して技術を磨きたい。いずれは、自分のお店を」と将来の夢も語ってくれた。

先生、地域、高校、家族というしっかりとした土台があるからこそ生徒たちは自分の力を磨き、のびのびと外の世界にはばたいていけるのだろう。

その後、九月十八日、一九日に開催された国際高校料理コンテストで岡田君、平澤君は銅賞を受賞したそうです。

(トヨタ財団アシスタント) 喜田亮子
(プログラム・オフィサー)



まごの店は2007年度「食の架け橋賞」大賞を受賞。

おじゃまします!—PO訪問記— 高校生レストラン「まごの店」は今日も大繁盛



地域 ニュース

「地域における難民支援を考える集い」 世界人権宣言60周年に向けて」を開催

特定非営利活動法人難民支援協会 伴めぐみ
難民支援協会ホームページ <http://www.refugee.or.jp/>

体やNGOの関係者の他、会社員や学生の方などさまざまな参加者が集まり、従来首都圏を中心に難民支援に関わってきた国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)などの難民支援団体と地元地域のアクターの交流という意味でも大変意義深いものとなりました。

日本の難民申請者数が増加する中で、愛知県に在住する難民も増えていきます。そうした難民が日本で安心して暮らすには、地域社会によるサポートが不可欠です。このイベントが愛知県における難民支援を考えるきっかけとなり、今後も支援の輪が広がっていくことを願っています。



集いの様子です。広報期間が短い中での開催でしたが、多くの方が集まりました。

難民支援協会では、トヨタ財団の助成を受け、「地域難民支援体制の構築」多文化共生社会の実現による地域社会の活性化を目指して」を実施しています。日本でも二〇〇六年度には九五四名と多くの方が庇護を求めて難民認定申請を行っており、最近では、難民からの相談が全国から寄せられる傾向が見られます。そのような背景から、二〇〇七年、地域に根ざした難民支援のための「全国難民支援者ネットワーク」を、大阪、東京、長崎、名古屋などの団体・個人の参加によって立ち上げ、二月八日にネットワーク参加団体である共の会(愛知県名古屋市)と難民支援協会(東京都新宿区)の共催で「地域における難民支援を考える集い」世界人権宣言六〇周年に向けて」を開催しました。

ネットワーク参加団体が共同して企画した名古屋地域で初めてのイベントでしたが、たくさんの方が集まってくださり、名古屋の底力を感じました。参加者からは「難民の声を直接聞け、貴重な体験ができた。名古屋ではこうしたイベントがほとんどなかったため、これからも開催して欲しい」、支援活動にも参加したい」という積極的な声が多く、関心の高さが伺えました。また、地元名古屋の各種団

秋の一日、「田毎の月棚田保存同好会」(長野県千曲市猿捨)の活動を見学させていただきました。同好会は、農業後継者がいないため荒れつつある棚田の風情をよみがえらせることを趣旨としたグループです。

猿捨地域は千曲川西岸に位置し、名月の里として全国に知られています。一九九九年に文化庁より名勝の指定を受け、さらにその棚田は、同年、日本の「棚田百選」にも選定されました。

ところが、最近では、耕作者の高齢化と後継者不足が原因で、耕作を放棄する農家が増えてきました。そこで、棚田の景観と水利施設の保全、荒廃地の復元などの活動を一九九四年以来続けてきたのが、この「田毎の月棚田保存同好会」です。代表の関口幸男さんによると、会員数は三〇名、「約四〇カ所での農業体験活動を通じて、農業の大切さを感じてもらい、人と人とのふれあいを深めながら棚田を保全していく」ことを実践してこられたそうです。

当日は、関口会長、同会の鈴木長治さん、宮下覚男さんの案内で棚田を歩きながら、活動の様子をつかいました。総面積は二五ヘクタールですが、その三分の一程度を散策しました。地域社会プログラムでの活動期間がおよそ半分経過したこの時点では、棚田での耕作、田植え、草刈、稲刈り、収穫という一連の作業を実施し終えたばかりでした。特に、活動のハイライトとなる稲刈り・収穫作業には、地元

おじゃまします!—PO訪問記

「地域の文化をみんなで守ろう」



昔の子どもも、今の子どもたちと一緒に、稲刈り・収穫作業に参加しました。

の篠ノ井西小学校四年生の児童も保護者と一緒に参加し、にぎやかな交流が図られました。後日、小学生から送られた感想文には、「収穫作業は大変だったけど、穫ったお米はおいしかった」という感想がつけられていたそうです。よい体験学習の機会になったようですね。

活動を通じて苦労するのは、「田植え」の日時を厳守すること。特に、実施前の週は平日も作業に追われます。普段の活動なら土日のみでも可能ですが、この時期は本業を休んで作業をすることも多々あります。助成金を活用して新たにトラクターの購入が可能となり、作業効率も向上

しました。耕作する水田が増えているにもかかわらず、これまでは他のグループや農家から農機を借用しながらの活動だったので、自分たちのトラクターを持つことができよかったです。本当に嬉しかったです。

助成をきっかけに、従来の「棚田の保全」だけでなく、「近隣農家の生活向上」という視点から何ができるのかについてメンバー間で議論するようになりました。というのも、棚田で収穫した米はおいしいと評判だったため、より広範囲に販売促進を図れるのではないかと、真剣に検討するようになったのです。

一方で、メンバーの高齢化、活動資金の不足は頭の痛い問題です。現在はもっぱら同好会費に支えられている活動で、メンバーの労働はまったくのボランティア。棚田で生産された農作物の販売から得た収益の一部を活動資金に回すなど、活動継続のための仕組みづくりに奔走しているところです。

以前は、「よそ者が、なんかやっているな」「邪魔になる」など、近隣農家の方々の受け止め方も厳しいものがあつたようですが、今では「先祖代々の棚田を一緒に守ってくれている仲間」という評価に変わってきました。地域での行事に積極的に参加するようになり、会の側から交流会を企画したりと、普段からの地域つきあいを大切にしながら活動しています。

(トヨタ財団アシスタント) 田中恭一
(プログラム・オフィサー)

